



HOMO FABER EVENT

Crafting a more human future

10 April-1 May 2022 VENICE FONDAZIONE GIORGIO CINI

展覧会ピックアップ

「12 Stone Garden」

深澤直人、内田篤呉のよるキュレーションのよる特別展示

日本の人間国宝 12 名の至宝の技。手技が生きる逸品を間近に見る。



人間国宝、藤沼昇による
根曲竹花籠「春潮」。
©Gerald Le Van-Chau

〈みどころ〉

- ・人間国宝（日本の文部科学省が認定する「重要無形文化財保持者」）12名の作品を展示。
- ・会場構成は深澤直人。パツラディーオ建築の大食堂の壮大な空間に、日本庭園の石をモチーフにデザインした12の展示台を配置。
- ・深澤直人と内田篤呉が作家の選定を担当。着物、漆塗のハーブ、竹の花籠、備前焼、木象嵌などの名技を紹介。

Home Faber Event 2022 で開催する 15 の展覧会のうちのひとつ、日本の人間国宝 12 名をお招きする特別展。16 世紀のパツラディー建築の大食堂を会場に、デザイナー、深澤直人が展示設計を担当。Homo Faber Event 2022 の特別招聘国である日本が大切に守ってきた究極の伝統工芸技に迫ります。

広範囲にわたる日本の伝統工芸の各分野から、深澤直人とともに MOA 美術館・箱根美術館館長である内田篤呉が 12 名を選定。着物や漆塗のハーブ、竹の花籠、備前焼、木象嵌などを紹介します。作品の展示とともに、制作の過程やものづくりの裏側を垣間見る映像も上映。また、併催の企画展「The Ateliers of Wonders」では、写真家、川内倫子が撮り下ろした人間国宝の工房の様子を鑑賞することができます。

深澤直人は、この空間を大胆に見せながらも、鑑賞者の体験と調和することを想定。空間とのコントラストを考えながら 12 の展示台を配置し、ほのかな照明で演出。作品を印象的に見せるとともに、来場者に会場のスケール感も同時に堪能してもらいたいと考えています。来場者は間近で作品を見ながら技の精緻さを堪能するとともに、古来より受け継がれてきた知と技、そして誠実さがそのなかに息づいていることに気づくでしょう。

「名工の姿勢からは、単にものづくりに専念する気持ちだけでなく、受け継いだ歴史と伝統を未来につないでいこうとする責任感が感じられます」 —— 深澤直人



HOMO FABER EVENT

Crafting a more human future

10 April-1 May 2022 VENICE FONDAZIONE GIORGIO CINI

展覧会ピックアップ

「The Ateliers of Wonders」

川内倫子が芸術的視点で捉えた、工房に立つ人間国宝の姿

日本古来の伝統を受け継ぐ12名の人間国宝たちの創作の瞬間に迫ります。



人間国宝の十四代今泉今右衛門の工房にて
Rinko Kawauchi©Michelangelo Foundation



人間国宝の佐々木苑子の工房にて
Rinko Kawauchi©Michelangelo Foundation

〈みどころ〉

- ・写真家の川内倫子が、「重要無形文化財保持者」である卓出した職人たちの動き、日頃使用している道具を撮り下ろします。
- ・ルネサンス様式のサイプレス回廊でゆったりとした気分になりながら、日本の名工の工房に迷い込んだような特別な感覚を覚えます。
- ・正確に塗られていく赤漆、素早く編み上げられる竹ひご、ふわりと素地の上に乗る金箔。職人の手の動きの一つひとつが、豊かな文化継承の結晶であることを深く理解できます。

数多くの賞を受賞している写真家、川内倫子の写真作品を展示する「The Ateliers of Wonders」では、日頃見ることができない日本の人間国宝たちの創作風景をつぶさに紹介していきます。国が制定する「重要無形文化財保持者」である陶芸、漆芸、染織などの名匠たちから繰り出される超絶技巧の数々。古来の伝統を大切に守り、責任をもって受け継ごうとする気持ちから高度な芸術表現が生まれ、また後世へと伝わっていく様子が伝わってきます。

芸術性に富み、知性の漂う川内倫子の写真は、12名の名匠たちの素材、技術、動き、知識を事細かに捉えています。日本が大切に守ってきた漆の上塗り、友禅の染め、紬織、磁器の色絵付けといった豊かな文化、ものづくりの瞬間を捉えています。正確に塗られていく赤漆、素早く編み上げられる竹ひご、ふわりと素地の上に乗る金箔。職人の手の動きの一つひとつが、豊かな文化継承の賜物であることを深く理解できるでしょう。

写真作品は、ルネサンス様式のサイプレス回廊に展示され、人間国宝たちの工房の様子をじっくりと鑑賞できるまたとない機会です。12名の人間国宝は、デザイナーの深澤直人と MOA 美術館館長／箱根美術館館長の内田篤呉により選定され、両名のキュレーションにより12名の人間国宝の作品は「12 Stone Garden」で展示されます。

「人間国宝の方々と直接会い、実際にお仕事されている様子を拝見できたのは、本当に光栄なことだと思っています」

——川内倫子

〈参加作家〉五十音順

伊勢崎 淳 Jun Isezaki / 備前焼

12世紀から岡山県備前市を中心に伝わる備前焼の代表作家の一人。伝統的な技法を用い、茶陶からモダンなオブジェまで幅広く制作する。

十四代今泉今右衛門 Imaemon Imaizumi XIV / 色絵磁器

佐賀の鍋島藩窯の御用赤絵師の伝統を正統に受け継ぐ今右衛門窯の第十四代を務める。

大角 幸枝 Yukie Osumi / 鍛金

銀の板金を木槌で打って器を成形する鍛金技法に、金と鉛の増減で装飾を施す、現代感覚に溢れる作品を製作する。

大西 勲 Isao Onishi / 髹漆

ヒノキの薄板を曲げる素地づくりから、漆の上塗りの仕上げまでを一人で行っており、その作品は力強く、量感にあふれている。

北村 武資 Takeshi Kitamura / 西陣織

京都に伝わる伝統的な織物の技法を習得したのち、一旦は途絶えていた羅と経錦を復元した。

佐々木 苑子 Sonoko Sasaki / 紬織

蚕から紡いだ糸に天然草木染めを施し、紬織の技法で表現。2009年に旭日小授賞を受賞している。

須田 賢司 Kenji Suda / 木工芸

指物の高い技術をベースに複雑な象嵌や漆の装飾を加えた箱などを制作する。

林 駒夫 Komao Hayashi / 桐塑人形

17世紀まで歴史を遡る桐塑人形を制作。能をはじめ、狂言、歌舞伎、京舞といった日本伝統芸能に造詣が深い。2009年旭日小授賞を受賞。

福島 善三 Zenzo Fukushima / 小石原焼

17世紀から福岡県小石原村に伝わる青磁釉を用いた小石原焼を継承する。

藤沼 昇 Noboru Fujinuma / 竹工芸

竹ひごを織ったり、組んだりしながら繊細なデザインのカゴや造形物を製作する。日本の竹工芸は中国・唐から8世紀に伝わり、発展したもの。

室瀬 和美 Kazumi Murose / 蒔絵

8世紀から伝わる蒔絵技法を用い、現代的な解釈の漆工芸を製作。会場では、室瀬が仕上げたハープを展示する。

森口 邦彦 Kunihiko Moriguchi / 友禅染

京都の友禅染の継承者。雪や花、流水などの自然景をモチーフとした幾何学文様で作品をつくりあげる。

人間国宝とは？

日本の美術史がはじまって以来、工芸の技はこの国の文化に深く根ざしている。日本政府はこの文化遺産を守るために、1950年に「人間国宝」の選定を開始。人間国宝とは、歴史をかけて培われた技術を習得し、重要無形文化財の保持者として各個認定された名匠たちを示す。この制度は、時代を超えて受け継がれた知識を、後世へと残す目的も持つ。ひとつは人間国宝として認定されたものは、技の保存のために、厳格な要件を遵守することを求められる。

「12 Stone Garden」「The Ateliers of Wonders」は、いずれもミケランジェロ財団の展覧会「Homo Faber 2022」で展開する15の展覧会のひとつです。「12 Stone Garden」は、日本工芸会のご協力のもと、開催いたします。



「12 Stone Garden」

深澤 直人 Naoto Fukasawa

デザイナー、教育者、キュレーターとして、世界中の名だたるブランドへ独自のデザイン哲学を展開。世界各国のメーカーと協働を行っており、精密電子機器から家具、空間、建築まで、手がける分野は幅広い。崇高な美の意識と静寂な感覚とのバランスを大切に、モノの本質を探り出す感覚の高さに国際的な評価が集まっている。日本民芸館館長、多摩美術大学教授、ロエベクラフトプライズの審査員なども歴任。2007年、イギリスの王立美術協会により、「Honorary Royal Designer for Industry」に選出。2018年、イサムノグチ賞をはじめ、多数の受賞歴を誇る。



内田篤呉 Tokugo Uchida

MOA美術館、箱根美術館館長を兼任する内田篤呉は、日本でもっとも著名な美術評論家の一人である。2007年に慶應義塾大学より美学博士。国内外で講演活動を行う。文部科学省文化審議会の委員であり、日本の人間国宝の選定にも関わっている。漆芸の専門家として伝統工芸にまつわる政府機関に関わるほか、日本工芸会副委員長も務めており、著書も多数手がける。



「The Ateliers of Wonders」

川内倫子 Rinko Kawauchi

1972年滋賀県生まれ。作品集『うたたね』『花火』で2002年木村伊兵衛写真賞、2009年第25回 Infinity Award 芸術部門賞などを受賞。2016年熊本市現代美術館『川が私を受け入れてくれた』をはじめ、個展も多数開催している。代表的な作品集に『Halo』(2017年)、『はじまりのひ』(2018年)、『When I was seven.』(2019年)など。

概要

Homo Faber Event

Crafting a more human future

会期：2022年4月10日（日）～5月1日（日）

会場：ジョルジョ・チーニ財団（ヴェネチア、サン・ジョルジョ・マッジョーレ島）

ミケランジェロ財団 クリエイティビティ&クラフツマンシップ部門が主催する「Homo Faber Event」は、実演やデジタル技術、展示や手工芸などの表現を通じて、多様な素材、技巧による高度な職人技に焦点をあてる国際的な展覧会。今回は、機能的な日用品から圧巻の装飾品まで、未来へと残していくべき工芸の役割を明らかにしていきます。本展は、日本の人間国宝の超越した技を目の当たりにする絶好の機会でもあり、いかに工芸がアートやデザインと関係しているかをも知ることができます。来場者はヤング・アンバサダー・プログラムに参加している学生たちによるガイドツアーで15の展示を鑑賞。ヴェネチア湾の真ん中にあるサン・ジョルジョ・マッジョーレ島のジョルジョ・チーニ財団を、著名なキュレーターとデザイナーが、圧巻の展示室へと変換していきます。これに加えHomo Faber in Cittàと題し、自身でプランを立てながらヴェネチア市内を巡り職人技に触れるプログラムも用意しています。homofaber.com

【PRESS CONTACT】ご質問、取材・掲載等のご希望は下記へお問い合わせ下さい
竹形尚子 (Daily press)

03-6416-3201 / 090-1531-6268 naotakegata@dailypress.org

info@homofaber.com - homofaber.com

Organised by



Under the high patronage of



under the patronage
of the European Parliament



Schweizerische Eidgenossenschaft
Confédération suisse
Confederazione Svizzera
Confederaziun svizra
Consolato generale di Svizzera a Milano

In partnership with



Fondation
Bettencourt
Schueller



FONDAZIONE
COLOGNI



MESTIERI D'ARTE



GIORGIO CINI

